



よみさんぽ

2019

Vol. 28

シリーズ 身近な生き物

自然の中の学校だからできること
生き物を通してコミュニティをつくる



写真家 野口勝宏

シリーズ 身近な生き物

自然の中の学校だからできること 生き物を通してコミュニティをつくる

語り 石川 顕一さん 岡野 ^{ともたか}友敬さん
(さいたま市立芝川小学校校長) (さいたま市立芝川小学校 PTA 会長)

学校でうさぎなどの動物を飼育した経験、多くの世代の人たちにあるのではないのでしょうか。学校教育の中で、生き物との触れ合いや飼育に関わることで生き物の大切さなど多くのことを学ぶ機会がありました。しかし近年では、飼育小屋だけがさみしく残っているという所も少なくありません。誰が責任をもって育てるのか、エサはどうするのかなど、教職員の過重労働が問題になっている昨今では、取り組みに消極的になるのだと思われます。ところが、やどかりの里の本部（見沼区中川）に近い芝川小学校で、新たに烏骨鶏を飼い始めると聞き、（ゆくゆくはヤギも……）やどかりの里とも何かいっしょにできないかと声をかけていただいて、「生き物」「地域」「つながり」……これもご縁だと思い、早速学校に伺いました。

生き物との関わりが生み出すもの

芝川小学校は、見沼たんぼが目の前に広がり、さいたま市見沼区と大宮区の区境に位置する小学校です。近くには合併記念見沼公園があり、地域の人たちの散歩コースにもなっています。今年度創立45周年を迎えました。やどかりの里の本部から歩いて20分ほどの距離にあり、やどかりの里の前は子どもたちの通学路になっています。

校長を務める石川顕一先生は、「学校が地域の軸になること、そのためには人が集まる場にしていく必要がある」とおっしゃいます。その学校と地域をつなぐきっかけとなるものに「生き物」の存在があるようです。これを現実のものにしていく立役者の1人が、PTA会長で画家でもある岡野友敬さん。やどかりの里と生き物、学校をつないでくださった方でもあります。「生き物との関係の中で子どもは育つ」と目を輝かせながら語ってくださいました。動物と触れ合う時間の中で、子どもたちと動物との距離感が徐々に縮まっていく様子、そして次第に「この草は食べるけど、これは食べない」など、いろいろなことに気付いていく様子を目の当たりにし、子どもたちの学びとしての面白さや癒しのような可能性を感じたと言います。そこで、「烏骨鶏を飼いませんか」と校長先生に投げかけ、お試しとして飼い始めました。

誰もが関われる、誰もが楽しめる

芝川小学校は正門を入れて目の前に飼育小屋があります。多くは敷地の隅のほうにあるのではないのでしょうか。ここにはいつも岡野さんがいて、岡野さん

学校の正面にある飼育小屋



烏骨鶏とチャボ



石川顕一校長



岡野友敬 PTA 会長



が楽しそうに動物の世話をしているところに子どもたちや先生との会話が生まれています。長年あずきちゃんという白うさぎ1羽だった小屋に、烏骨鶏3羽が仲間入りしました。飼育係は4年生が中心で、卵を孵化させようとチャレンジ。すると、今か今かと目をキラキラさせながら子どもたちが小屋に集まっていたようです。そして9羽が孵化しました。数羽はPTAの方たちが引き取り、ご自宅で飼われているそうです。休みの日には、親子で小屋を訪れる姿も見られるようになりました。小屋の中は、動物たちの性格や生態をよく観察されている岡野さんが、PTAの仲間たちと協力しながら、落ち葉をたくさん使って寝床を作ったり、池を作ったり、たくさんの工夫が凝らされています。今小屋には、うさぎのあずきちゃん、チャボ、真っ白な羽の烏骨鶏が暮らしています。伺った日にも卵を発見。お土産にいただきました。ご近所の烏骨鶏が「コケッコー」と泣き始めると、それを受けるかのように小屋の烏骨鶏が泣き始めました。まずは年長さんの烏骨鶏から順番に鳴くのだそうです。自然の中にある学校だからこそ育てられると感じました。

岡野さんの夢はまだまだ広がります。次はこの小屋にヤギを仲間に加えてはどうか検討中のようです。校長先生もヤギが地域との接着剤になるのではないかと期待。「そうだ、ヤギを見に芝川小学校へ行こう」が地域の合言葉になっていくことが狙いようです。

学校が地域のハブになる

夢広がる話を伺いながら、ふと疑問が湧いてきました。「なぜ学校やPTAがこれだけの取り組みをするのだろうか」と。

そこには「学校が地域をつくる」「子どもを地域で育てる」という考えがあるようです。この学区には公民館がないということも影響しています。教育の拠点でもあり、文化の拠点でもある学校。その学校が地域から注目され、楽しい交流の場になることが、結果的に子どもたちの安全・安心につながっていくのだと言います。いろいろな事件、事故が起こる度に、学校の安全対策が強化され、結果地域とは一線を引いた管理環境をつくる傾向にあります。子どもの安全を守るためには必要なことですが、芝川小学校ではあえて学校を地域に開くことで安全な環境を作ろうというのです。この考え方に驚くと同時に、やどかりの里が大切にしている「みんな違ってみんないっしょ」という障害者権利条約の考えにも通じるものがあると感じました。学校も地域も、子どもも大人も、障害のある人もない人も、みんな違ってみんないっしょの社会を当たり前にしていくことに通じるように思います。

ヤギが校庭の雑草を食べている姿は、なかなか見られるものではありません。そして、目の前に広がる見沼田んぼの土手の管理にヤギが一役果たせるかもしれません。さらには、犬の散歩をする人だけでなく、ヤギが街中を散歩している姿もこの地域では当たり前の光景になる日が来るかもしれません。

岡野さんは、生き物を育てることにはいろいろな学びやつながりを創り出す可能性があると言います。そして、学校で生き物を育てるということは、犬や猫のようなペットとは違い、お金で解決できるものではなく、いろいろな人の協力を必要とすることに意味があると言います。今の世の中に見失いかけている「ややこしい関係」をあえて地域の中に、人と人の中に関係の中に創り出そうとしているのだと感じます。

うさぎのあずきちゃん



烏骨鶏の抱卵



飼育小屋の手作り看板



チャボのお世話をする生徒



つながり続けることの大切さ

生き物を育てることには責任も生じます。課題もたくさんあります。だからこそ、地域の人たちの力を借りて育てていくが必要になってきます。「昔は家に鶏やヤギを飼っていた」という高齢の方たちの経験を教えてもらったり、農家さんに畑の作物のくず野菜をもらったり、そのうちにみんなが座って話ができる東屋が必要になってくるかもしれません。校長先生と岡野さんのお話は次々と広がっていきます。

すでに芝川小学校では、1979（昭和54）年からホタルの飼育活動を教育の中に取り入れ、今日まで続いているという実績があります。学習教材としてだけでなく、高齢者施設への出前鑑賞会など、地域に出向いていく活動にも取り組んでいます。そして、今では毎年6月上旬に開催される「夜のホタル観賞会」には、1,000人を超える人が来校する一大イベントになっています。このホタル飼育活動のように、新しい生き物の仲間たちとの関わりが、子どもたちの学びにつながり、保護者が学校とつながるきっかけになり、地域の人たちが立ち寄りたくなる、協力したくなる、そしてこの小学校を巣立った子どもたちが、大人になり、また飼育に関わるようになる……そんな息の長い活動につながっていくことを願っています。

やどかりの里の本部には「やどかりテラス」が隣接しています。地域の人たちが気軽に立ち寄れる場所を目指して造られました。そこにヤギが来る日も近いかもしれません。生き物を中心としたコミュニティづくりの楽しさを教えていただいたそんな取材となりました。（記 大澤 美紀／写真 宗野 政美）

農地と接する小学校

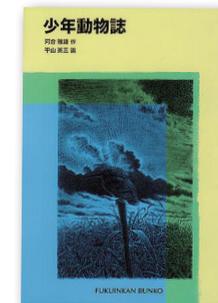


芝川沿いの住宅地



成長を支えた自然とのつきあい

並木せつ子



『少年動物誌』（河合雅雄著 福音館書店 2002年刊）

今、子どもたちと動物との交流と云ったら、犬や猫、ウサギなどをペットとしてかわいがるというのが一般的でしょうか。学校でウサギなどの小動物を育てたり、イベントで動物とふれたりする機会もあるようです。

この本は、身近に豊かな自然があった頃の少年の話です。虫、鳥、魚、大小あらゆる動物や、さまざまな植物に囲まれた戦前の丹波篠山（兵庫県）で、男ばかり4人の兄弟のなかで育った腕白な少年と、動植物たちとの野生的な“つきあい”が描かれています。少年は著者自身で、後にゴリラやヒヒなどサル学の研究者になった河合雅雄、4人兄弟のうちの1人は心理学者の河合隼雄です。

飼った動物は、犬、鶏、シマリス、十姉妹、文鳥、インコ、ほかにドジョウ・メダカ・エビなど20種もの魚類、カブトムシ・クワガタ・オケラなどの昆虫も……傑作なのは「毒ガス部隊」で、ヘコキムシ、カメムシ、ナミアゲハの幼虫など、臭い虫ばかりを「屁こき城」に集めました。そこへ新たにゴイサギの幼鳥2羽も加わり、少年たちは餌の調達に奔走します。ゴイサギの餌になる蛙をとりにゆき、自らが殺した「るいるいと横たわる蛙の死骸」を見たときには、自然と「強い悔恨の情」がこみあげました。

モルモットの餌になる草が足りなくて、畑にあった麦を刈り取るという盗賊まがいのことをやったり、犬の死骸が浮く池に生えた菱（ひし）の実を食べたり、今ではあまり考えられませんが、著者と同年代の子どもなら共通してもっていたような経験ではないかと言います。

「植物であれ動物であれ、1つ1つが自然をつくりあげるための役割を担っている」と考える著者、その成長を支えてくれたのは「少年期の深い自然とのつきあい」でした。こんなつきあいができる身近な自然を大切に残さなければ、という気持ちが伝わります。

あの街 この街 俊一郎が行く・22

人と犬

身震いする犬

「仔犬の教育のために、生後2か月までは母犬と一緒に過ごさせます。引き取りはそれまでできません」犬舎からそのように伝えられてからの1か月は、とても長く感じました。待ちに待ったお迎えの日、犬舎で久しぶりに会った2匹は、少し大きくなり、視線も定まって自己主張が出てきたように見えました。

いくつかの書類のやり取りや、雑談を交わした後「そろそろ……」とどちらともなく切り出した瞬間、何かを察したのか、体格が良い茶色の犬が、身震いしたように見えました。用意した移動用の小屋に2匹を押し込み、困りごとがあれば連絡するよう言われ、玄関を出ます。何度もこのやり取りを見てきたであろう、犬舎に住んでいる猫が見送ってくれました。

2匹がやってきた

山梨の犬舎から私が住む下町までの移動の間、新しい環境への緊張、揺れに晒され続けること、初冬の寒さなど犬の体調についての心配は尽きません。かといって、急げば揺れが強くなり、体に負担がかかります。ゆっくり移動すれば、トイレの心配も……何度か休憩を挟みつつ、自宅に戻るまで手の汗が引くことはありませんでした。

ようやく到着し、用意した柵に2匹を放せば、しばらくクンクンと辺りを嗅いで、小屋に収まってくれました。馴染んでくれた、とりあえず成功です。

深夜の団欒、苦手な朝

実家に住んでいた頃のこと。早くても、夜の10時くらいにならないと仕事から帰らない父に合わせて、我が家の団欒は夜中近くが多かったのです。そのためなのか元からの性格なのか、早朝に出かける用事がある時は、徹夜をした

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）を複数行う。（写真 新 良太）



ほうが気楽なくらい、朝が苦手でした。寒い冬の朝はなおさらで、人並みに起きられない代わりに、夜半過ぎまで仕事などで過ごしてしまう不規則な生活から、なかなか脱することができませんでした。

そんな私に、2匹の仔犬は容赦がありません。朝6時過ぎ、東の空が白んでくると、鼻泣きを始めます。億劫に思って無視していると、徐々にその鳴き声は大きくなり、寝ていられません。そして、柵に近づくのが遅れると、その分だけ荒らされた柵の中を見ることになるのです。いつしか最初のひと鳴きで起きるように、こちらも躰けられてしまいました。

それは成年からはじまった

早起きのおかげで、散歩では早朝の空気の清々しさや、朝ごはんの美味しさを知ることができました。職場に早出すれば、午前中に2つくらいは仕事が済ませられ、黄昏時には帰宅できます。犬がやってきたことで始まった習慣ですが、以前とは異なる充実感が得られています。

「犬」という漢字は、人がハチマキをして汗かいているように私には見えます。犬によって頑張るのが人なのかな？……と思う今日この頃。そんな日々は、これからも続くでしょう。



大切な人に思いを馳せて

やどかりの里コンサート 2018

「しげちゃん一座絵本と音楽とトークライブ」

2019年2月3日(日) 埼玉会館小ホールにて、やどかりの里コンサート 2018「しげちゃん一座 絵本と音楽とトークライブ」を開催します。

やどかりの里とコンサート活動

やどかりの里では、長年コンサート活動に取り組んでいます。まだ精神障害のある人への支援活動が福祉に位置づけられていなかった時代、必要な活動を継続していくための自己資金獲得を目的の1つに掲げ、取り組んできました。

コンサート実行委員会では、障害のある人ややどかりの里を取り巻く状況が変化する中で、改めてやどかりの里のコンサートを何のために、どのように進めていきたいのかを話し合いました。その議論の中で、障害のあるなしにかかわらず、音楽をみんなでいっしょに楽しむ場をつくること、また、音楽を通してやどかりの里と地域が交流を深め、つながっていく機会として取り組んでいくことを確認しました。2015(平成27)年から始めた見沼区中川地域で12月に行うミニコンサートも、その一環として取り組んでいます。

なぜ、「しげちゃん一座」のライブを行うのか



今回のゲストは、俳優・室井滋、絵本作家・長谷川義史、サクソ奏者・岡淳、マジシャン&ミュージシャン・大友剛の4人で構成されるユニット、「しげちゃん一座」。

なぜ、「しげちゃん

一座」なのかと思われる方もいることでしょう。「しげちゃん一座」が、大人も子どもも楽しめる大人気のエンターテインメントとして知られているから……それだけが理由ではありません。

やどかりの里のコンサートでは、これまで、命や平和の尊さ、1人1人の存在の大切さなどをメッセージとして伝えられるよう、企画を進めてきました。

今回も、1人1人の存在の尊さを伝えていきたいと考え、ゲストの選定に頭を悩ませていました。そんな時に「しげちゃん一座」の公演を観たことがある職員から、やどかりの里のメッセージと通じるところがあるのではと提案があり、実際に「しげちゃん一座」の公演に足を運びました。

それぞれの道のプロがそろった「しげちゃん一座」の公演は、絵本の朗読やマジックショー、音楽、トークと盛りだくさんで、まばたきをするのも惜しいほど。4人の本気の公演が、来場者の心をわしづかみにするのを目の当たりにしました。笑いあり、感動の涙ありの公演に心を揺さぶられることを体感し、コンサート委員の総意で、ゲストが決定しました。

会場全体を包む温かな空気感。やどかりの里のコンサートに来た人たちと大切な誰かを想い、「ほっこり」するひとときを共有したい……そんな思いで準備を進めています。

(記 宗野 文)

お問い合わせ・チケットのお申し込み やどかり情報館 (048-680-1891)



音楽・絵本・マジックで 人とつながりたい

大友 剛 さん
(MUSIC & MAGIC代表)



大きな耳と目が印象的な青い猫が、お気に入りの白い靴を履いて「かなりさいこう！」と歌いながら歩き出す……。ワクワクする出だしの「ねこのピート」シリーズ(ひさかたチャイルド)や、絵が一切ないのに子どもたちが笑い転げて夢中になる不思議な絵本、「えがないえほん」(早川書房)の翻訳者である大友剛さん。NHK教育テレビ「すくすく子育て」にマジシャンとして準レギュラー出演するなどの経歴も持っています。

また、俳優の室井滋さん率いる4人組エンターテインメント集団「しげちゃん一座」の一員でもあります。

子どもの頃からマジックと音楽と絵本が大好きで、現在は日本全国の幼児教育の現場、さらに海外でも子

どもたちの教育現場での演奏活動に飛び回っています。2011(平成23)年からは東日本大震災の被災地をめぐる「Music & Magic キャラバン」を立ち上げ、たくさんの仲間とともに被災地ツアーを継続しています。

今回は、大友さんの幅広い活動の原点にある思いや、今年2月3日のやどかりの里コンサート「しげちゃん一座」の見どころを聞きました。

活動の原点となる体験

大友さんは、ネバダ州立大学で音楽と教育を学び、その後北海道のフリースクールに音楽スタッフとして携わりました。子どもたちもスタッフも住み込んで生活する場でしたが、経済事情は厳しく、昼間はフリースクールのスタッフとして働き、夕方からは小樽のライブハウスで演奏をして、収入を得ていたそうです。

大友さんは、そこで出会った子どもたちとともに生活する中で、子どもたちの持つ背景の重さを受け止め

てきました。そして「音楽文化は苦しい思いをしている子どもたちの救いになる」と話します。

そんな大友さんに音楽活動の原点を聞いてみると、そこには自らの経験がありました。

子どもの頃から料理も好きだった大友さんですが、小学生の頃に趣味のことをからかわれて、いじめに遭ったのだそうです。大友さんは「このことはあまり話してこなかったけど、最近話すようになったんです。そうすると、実は自分もつらい経験があると話してくれる方がたくさんいるんです」と言います。

つらい時期に自分を支えてくれたのが、大好きだった音楽、マジック、絵本、そして家族だった。今の活動は恩返しのような気持ちもあると、大友さんは語ってくれました。「今でも子どもたちを取り巻く環境はあまり変わっていない。僕は一見エンターテイナーですが、本当は文化を通して教育改革や、子どもたちのケア、サポートをしたい。そんなことを表現しているんです」と、穏やかなながらも力強く語る姿が印象的でした。

一晩で「しげちゃん一座」結成!!

2010(平成22)年、かねてから親交のあったイラストレーターで絵本作家の長谷川義史さんが、室井滋さんとライブをやるというので見

行くと、その場で即興演奏とマジックを披露することに、室井さんが「やりたかったのはこれだ!このメンバーで全国をまわる!」と宣言し、その日のうちに結成されたのが「しげちゃん一座」なのだそうです。

しげちゃん一座は、室井滋さん、長谷川義史さん、大友剛さんと、同じく飛び入り参加した、サキソフォン奏者の岡淳^{まこと}さんの4人で、絵本の朗読、音楽、トークライブ、即興イラスト、マジックなど、実に盛りだくさんなステージを見せてくれる集団です。全国をまわって繰り広げられる楽しいライブは、小さな子どもたちからお年寄りまで、年齢を問わず愛されています。

やどかりコンサート、お楽しみに!

最後に、大友さんにしげちゃん一座の見どころを聞いてみました。

「今はみんな忙しいけれど、絵本1冊がもたらしてくれる豊かさや幸せを伝えたい。豊かさとは、優しい気持ちになれることで、人が元気になれる原動力です。

室井さんは人間が大好きで、“直感・感覚の人”。その場の空気感をととても大切にしています。そんな室井さんを中心に繰り広げられていくステージを、皆さんもいっしょに感じてほしいです」(記 日野 陽子)



やどかりの里
コンサート
2018

大人も子ども楽しめる!! 大人気エンターテインメント♪
朗読あり, 音楽あり, おしゃべりあり... 今までにない笑い涙の渦が広がる!

SHI GETYANICWZA

しげちゃん座

絵本と音楽とトークライブ

in SATTAMA

全席指定 埼玉会館小ホール
2019年2月3日(日) 開場: 12:30
開演: 13:00

チケット 一般 / ¥3,500 子供 / ¥2,000
※座席を利用する小学生以下のお子様

チケット販売

やどかり情報館 / 048-680-1891
やどかりの里各事業所
QRコードからでもお申し込みできます

主催: 公益社団法人やどかりの里
後援: 埼玉県・埼玉県教育委員会・埼玉県社会福祉協議会・さいたま市・さいたま市教育委員会・さいたま市社会福祉協議会・埼玉新聞社・テレビ埼玉

大切な衣類は安心安全の
夕リちゃんマーク
のお店へ

夕リちゃんマークはクリーニングの専門店のしるしです
クリーニングの夕リちゃん

春日ランドリー

〒337-0013 さいたま市見沼区新堤152
東宮下団地19-5
TEL 048-685-0811

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています!

1マス (64mm * 46mm) 5,000円

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちず
とうふ屋 一豆
TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン
TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず
TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

- 鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。
- 障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています! 問い合わせ先: 048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

- 本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313
- 《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区) ●さいたま障害者労働センター(橘川市)
- 《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ ●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)
- 《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区) ●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／猪苗代町生まれ。写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。

全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北FLOWERJET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。

全国に明るさを届けたいと活動を続けている。

野口勝宏オフィシャルサイト

<http://noguchi.photo>

表紙写真 白鷺（ダイサギ）

白鷺の美しさを残そうと足を止めカメラを取り出した途端、その場から飛び去ってしまう警戒心の強い野鳥です。何か違和感を感じたのなら、その場を離れることが身を守る最善の対策なのかも知れません。

ダイサギの冬羽ではくちばしが黄色くなり、夏羽では黒くなります。

自然界には私たちがまだ知り得ない多くの法則があるようです。

さいたま見沼よみさんぽ 第28号

発行 2019年1月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里
理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

今年1年、よみさんぽでは「身近な生き物」に関するお話をお届けしました。来号からは「食」に注目します。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同